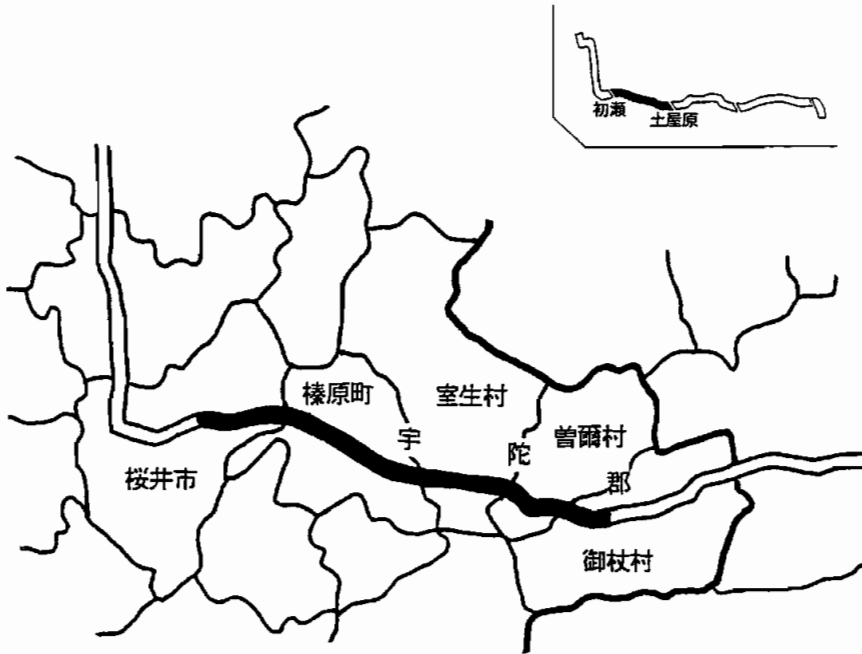


2日目

桜井市初瀬 ～ 宇陀郡御杖村土屋原 約27.1km

初瀬 (吉野館) - 化粧坂 - 与喜浦 - 吉隠 - 角柄 -
西峠 - 萩原 (榛原) - 檢牧 - 自明 - 高井 - 赤埴 -
諸木野 - 石割峠 - 上田口 - 黒岩 - 不動坂 - 山柏
- 鞍取坂 - 桃俣 - 土屋原 (まつや旅館)



2日目の行程は、桜井市初瀬 (吉野館) から、宇陀郡御杖村 (まつや旅館) までの約27kmである。距離は短い、終日アップダウンをくり返す。峠の数では3日目と大差ないものの、全体としては登り基調。舗装路の少なさでは全行程中のトップであろう。その意味では最も近世の旅に近づいたと感じる日でもある。そういえば、この日と翌3日目は、何かと人の情けに触れることが多い。道の状態と人情に相関関係があるように思えてしまう日である。

初瀬

出発前に、初瀬をぐるりと見渡してみよう。

まずは長谷寺。十一面観音を本尊とし、西国観音霊場の八番札所として巡礼者の信仰を集めてきた。創建については異説が多いが、朱鳥元年(686)説が有力。現在の本堂がある付近に観音像を祀る仏堂が出来たのは、聖武天皇のころといわれている。当初は東大寺の支配下にあったが、のち興福寺末に転じた。室町時代以降、伊勢参宮が流行すると、長谷の観音を天照大神の本地仏とする本地垂迹の信仰もあって、参詣者が増加した。明治に至るまで、度々にわたって火難に遇っており、現在の本尊は天文7年(1538)、本堂は慶安3年(1650)のもの。鐘楼・登楼・楼門など、現在見られる長谷寺の姿は、ほぼこれ以降に整えられたものである。

また、街道関係のものとしては、山門前、普門院、宗宝蔵の3ヵ所に道標が保存されている。山門前のもは笠山荒神(桜井市笠)を示しており、長谷寺前バス停(山門前広場東南)標柱横にある。普門院のものは庭内にあり、同じく笠山荒神のほか、桃尾滝(天理市)、友田(都祁村)を示す。宗宝蔵(文化財展示・収蔵室)庭内のもは、菅野村行悦による回国供養碑で「いせ宮川へ廿一里半」と刻む。行悦の回国供養碑は現在7基が確認され、その中ではこれが西限になるが、他所よりの移転で、原位置は判っていない(行悦の回国供養碑については72頁参照)。

化粧坂

吉野館の方々に見送られつつ、スタートである。前日夕方に通った道をしばし逆行すると、ほどなく伊勢辻に着き、ここからが実質的な2日目の行程となる。伊勢辻のくさ餅屋(さかえ屋)の角を左折(奈良方面から榛原方面へ直行する場合は右折)、伊勢辻橋で初瀬川を渡ると、朱塗りの目立つ崖下の祠(稲荷社)に突き当たって丁字路となっている。右折する方は、突き当たった山(愛宕山)を大きく迂回し、初瀬の谷の入口付近まで戻ってから国道165号へ合流する旧県道で、左折するのが旧街道である。

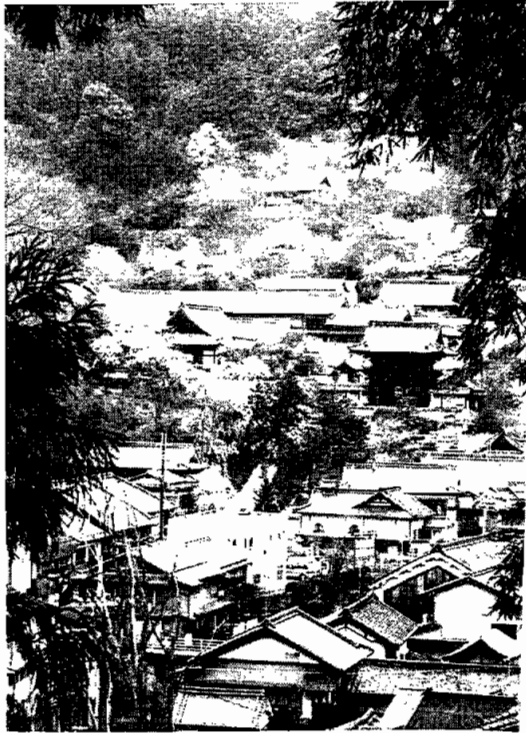
道はすぐ急な登りとなるが、これが化粧坂である。朝一番で足ができていない時でもあり、草鞋ばきの者はまだ足になじんでいない草鞋での登りとあって、ひもがひときわ痛く感じられる。コンクリートの簡易舗装の道は、四度ほどつづら折りを繰り返す。落葉期なら、二度目の曲折付近から長谷寺や初瀬の集落がよく見渡せて気持ちがよい。

つづら折りを過ぎた道は、山の稜線方向へ登ってゆき、与喜山の南側へ抜ける。こちらが朝倉から続いてきた初瀬の谷の本流であり、感覚的には、三輪〜朝倉で初瀬の谷に入り、長谷寺門前にちょっと寄り道をして、ここで元の谷に戻った、というところ。谷底付近に国道165号線と吉野川、谷の対岸・南側の斜面中腹を近鉄大阪線が走っている。

朝の長谷寺

ほとんどの寺として知られる長谷寺は、それゆえそのシーズン以外は非常に地味な顔も持っている。宝来講参加者の間では、早朝の長谷寺に人気がある。幸い、宿舎の吉野館は山門にも近いので、登楼に下駄の音を響かせて、朝の散歩がてらに観音様へのご挨拶、というのも良いだろう。地元の人たちが参拝にきているのも早朝ならでは。朝の空気のなか、舞台から見下ろす初瀬の町は、また違った顔をしている。

2日目の朝にして、すでに早起きと寄り道をする元気の残っていない人には、吉野館の裏に架かる天神橋を勧めておこう。ここから長谷寺が遙拝できる。これはこれで美しい姿である。



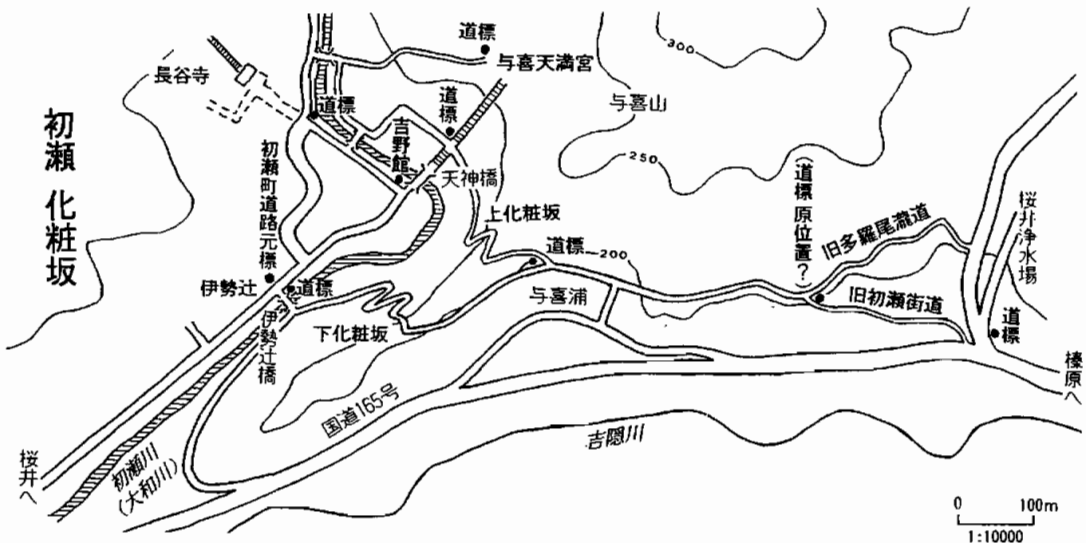
本居宣長も見た？
上化粧坂からの眺望 長谷寺と門前町

本居が通った「上化粧坂」
「化粧坂」の名は、本居宣長の『菅笠日記』にも見えている。しかし「化粧坂」には、宝来講が通る伊勢辻橋からの道（「下化粧坂」）のほか、伊勢辻を経由せず長谷寺山門前と与喜浦を短絡する道（「上化粧坂」）の二つがあり、長谷寺に直行した本居が通ったのは、上化粧坂だったようである。また、この坂について詳しい記述があるのは、この旅の往路のみである。宝来講とは逆向きにあたるため、「さがしき（険しい）坂をすこしくだる」と記しているが、伊勢向きに歩く場合は、その「さがしき坂」を登らねばならない。

吉野館から上化粧坂に出るには、吉野館裏手に架かる天神橋を渡り、与喜天満宮の参道石段を上って鳥居前に出る。この鳥居前で参道を横切る道が上化粧坂で、左は山門前へ、右は与喜浦へと続いている。鳥居の左側には「與喜天神宮」の石標があるが、「本社より観音江ゆきぬけ」とも刻んで道標を兼ねている。上化粧坂を下りてきた者に対して、天満宮経由で山門前に入る道あり、ぜひお立ち寄り、と案内しているわけである。石標の前には「ひだりいせ」と記す道標もあるが、これは向きが違っており、他所よりの移転であろう。上化粧坂はこの道標の指示と逆に右へ

上っていく。上がり始めは簡易舗装の細い道で、途中から未舗装に変わる。斜面に張り付くようにぐんぐん上っていくと、右側の視界が開け、足元には初瀬の街が広がる。手前に吉野館と天神橋が見え、奥へ参道が続き、さらに山門・回廊・本堂と、まさに一望である。本居も「此の坂路よりはつせの寺も里も目のまへにちかく、あざあざと見わたされるけしきえもいわれず」と記しているが、これを描写したものであろうか。

この先、3度のつづら折りを過ぎ、稜線を越えて吉隠川の谷に抜けると、伊勢辻からの下化粧坂と合流である。合流点には「通行危険」「子供のひとり歩き禁止」の看板が立っているが、宇陀山中の道々に較べれば、それほど荒れているわけではない。



与喜浦

集落に入る直前の左側に「右くわんおん」と刻んだ美しい道標が建っている。ここで合流してくる未舗装の道が上化粧坂である。合流点の左側には庚申堂もあり、庚申塔や地藏が納められている。ここは、集落外れのひっそりとした分岐点だったが、昭和63年(1988)頃、分岐点の西側にも民家が新築され、以前の印象とはずいぶん変わってきた。

道標から約80mで与喜浦集落中心部の丁字路にさしかかる。右へ下れば旧県道経由で165号線に合流する。宝来講でも初期にはこの旧県道を通ったが、旧街道はこの丁字路を直進するのが正しい。これを過ぎると道はまた軽い上りになるが、数十mで上り坂は終わり、同時に両側の家並も絶えて、農道風になる。道は左手に山、右手に棚田を見ながら進み、化粧坂から続いてきたコンクリート舗装が終わると、すぐ先で道は二手に分かれる。右手へ下るのが旧街道である。現在は完全に農道であり、畦道よりは多少広いという程度の幅になっている。道なりに進むと、奈良県営水道桜井浄水場下の、信号機のある丁字路付近へ出て、ガードレールの間から国道165号へと合流するが、合流点そのものは改良のため変更されているようである。

丁字路の東北側、浄水場の石垣の下に「多羅尾瀧 四丁」と刻んだ道標が建っている。多羅尾不動堂(字滝の奥)を示すものであろう。古い地形図で見ると、もともとこの丁字路はない。さきほど右にとった分岐点のもう一方の道、山沿いに左へ伸びていた道が、実は多羅尾への旧道である。この道標の原位置も、おそらくこの分岐点付近と思われる。また、この道の途中には享徳年間(15世紀)の道標があると伝えられているが、存在は確認できていない。

吉隠・角柄

街道はこの先、西峠⁵までの大部分が国道となって拡幅されており、家屋が支障して改良できなかった部分のみが旧道として残っている。その最初は、浄水場正門前を過ぎたあたりで、右側へ入る旧道である。旧道入口付近手前右側には、古い大型バス3~4台が留置されている家(本田家)があるので、見落とすことはないであろう。



多羅尾瀧を示す道標



吉隠
大峯奉納を兼ねた道標

さて、旧道はわずか150mほどで、また国道と合流する。短い区間ながら、ちょうど中央付近の左側に、石の覆いを設けた地蔵と、供養塔が建っている。旧道らしさを感じさせる遺物である。

合流して、また国道を行くと、約400mで吉隠^{よしかく}バス停に着く。ここから右手に入る旧道があり、国道歩きに疲れた神経が休まるひとときである。この旧道もそう長くはないが、家並は美しい。この家並の終わるあたりの左手に、大峯奉納^{おほねのほうな}を兼ねた道標がある。小さいうえ自然石のようにも見えて見落しやすく、稲神和子氏の『大和路・いせ路 道標の旅』にも載っていない。とくに分岐点でもないが、さりげなく「右いせ」と教えてくれる。やがて国道と合流、約60mですぐまた右へ旧道が分かれる。この旧道も200mほどで国道に出る。国道改良以前はここでΩ状のカーブを描いていたが、現在は国道の左側にその痕跡を残すのみで通行は不能である。

ここで桜井市から榛原町^{はせはら}に入る。峠を目前にして、こんな所が市町境とは不自然だが、これは編入の結果。もともと、この先の西峠^{しよがき}が式上郡と宇陀郡の境である。昭和34年(1959)、初瀬町が桜井市に合併されたが、のちに旧初瀬町の吉隠^{よしかく}・角柄^{つのから}・柳^{やなぎ}の三地区が榛原町への移管を希望、大紛糾のあげく吉隠のみが桜井市に残ることで合意をみた。以前はこの三地区だけを校区とする吉隠小学校があり、同窓生として住民の結束が強かったというが、現在は廃校となっている。

この先は国道右側、土手のように見えるのが旧道敷き。吉隠と角柄のほぼ中間、国道沿いに一軒だけ残る民家の前から、国道の左側へ渡っていたという。しかし国道が拡幅される際に原景は失われており、想像力をかき立て、目で復元してみる以外にない。100mほど行くと左側にコンクリートの細い道が登っており、角柄の集落内へ入っていく。ここからしばらくの間は旧道が残っているが、これも集落の東端まで。入口と同じようなコンクリートの坂道が国道に下りていて、この先はまた国道によって原景を留めぬまでに開削されている。

左手(山側)に西国供養塔・庚申塔などが立ち並ぶ一角がある。近年になって整備されたものと思われる。さらに進むと、同じく左側にコンクリート舗装の坂道と道標があらわれる。道標は「お滝みち」と刻んでいるが、この「滝」は多羅尾滝ではなく、ここから谷を少しさかのぼったところにある滝行場をさすものという。この道標も『大和路・いせ路 道標の旅』から落ちていた。

西 峠

三輪・慈恩寺より続いてきた初瀬の谷も狭くなり、正面に西峠付近が望める。峠の手前で道がカーブしているため、峠の切り通しそのものが見えてくるまでには、未だ少々距離を要する。右手に、パチンコ屋があらわれる。数年前から建っていたがいっこうに開店せず、不気味な存在であった。改元にかこつけて「平成」と名付けたものの、このままでは開店前にまた改元されるのではないかと、他人事ながら心配したが、平成3年(1991)夏、めでたく開業を迎えた。旧道はこの駐車場の中へ突入し、

沿道のまち④ 榛原町(奈良県宇陀郡) 人口 20,602 所帯数 5,685 面積 64.41㎢

〔沿革〕 明治22年中心となる榛原村が成立、同26年町制。昭和29年～44年に合併や編入で町域確定。

〔概況〕 中心街は宇陀川沿いに開けた榛原盆地に立地。周囲は山地で囲まれている。しかし交通の便には恵まれ、近鉄の開通で宇陀の中心の地位を松山(大宇陀)から奪った。近年はニュータウン開発も。

〔街道〕 町域ほぼ中央を東西に伊勢本街道が貫通、中心街の萩原宿・札の辻で伊賀方面へ向かう伊勢北街道を分岐する。近世はこうした条件のよさから宿場として栄えた。ほかに大和高原や大宇陀・菟田野方面への道も分ける。宝来講では西峠、萩原宿を経て諸木野、石割峠と本街道を直進、町域を横断する。

国道との境目を進む。駐車場東隣に数棟の倉庫があるが、もとはここに民家があり、近世の旧道もその前を通っていたという。国道改良で民家は新国道の北側に移転、残念ながらこの部分は通行できない。一方、駐車場を東側へ回り込んだ道は、さらに奥の予備駐車場入口へ達する。この左側に、小さな祠があり、未舗装の道が峠に向けて伸びている。これが旧県道で、途中からは近世の道と同じである。土を入れただけで均していないため、少々歩きにくい。登っていくと、約100mで人家の横に出る。消防機具庫に突き当たって左折、ここから舗装路となり、「あまのや食堂」の東側から国道に合流している。右へ曲がってまっすぐ峠へ向き直ると、峠は目睫である。現在の西峠は、国道改良のため大きく切り開かれ、峠の風情はないが、ドライブイン、ガソリンスタンドと、やはり旅人の疲れを癒し、この先の旅に備える施設が並ぶ。時代は変わり、旅の形が変わっても、峠を登りつめてひと休みという感覚は変わらないのであろう。

旧道は、峠のすぐ東側の変則五叉路を、左斜め方向に入る。入口に鉄の車止めがしてあって、こちら側から車両を乗り入れることはできない。ただしこれもまた旧県道であって、旧街道ではない。前述のように大規模な開削が進んだ結果、近世の旧道は残されておらず、図上の復元も困難であると思われる。旧県道はこのままガソリンスタンドの裏手を抜けていくわけだが、本来の旧街道ではないこともあり、トイレ休憩・サポート隊との合流を優先して、宝来講では国道を通行している。休憩を終えた本隊は、ドライブイン・ガソリンスタンド東側の信号を左折して旧道に戻る。旧道は200mほどでまた国道に出会うが、その手前、左側に西国三十三ヶ所奉納を兼ねた道標がある。山側へ上る道の途中に、ガードレールに隠される如く立っており、さらにご丁寧なことに、伊勢へ向いて歩く我々に背中を向けている。享保6年(1721)という、比較的古いものであるが、参加者のなかでもこれを見落とした人は多いのではないだろうか。

「すべり坂」

国道に出た旧道は、そこで途切れたように見えるが、よく見ると国道の南側・東鉄工所の前へ上がる細い道が確認できる。車一台がやっとの幅で、これが本来のサイズだったのであろう。峠道での道幅は、俗に五街道二間、脇街道一間といわれるが、比較的早い時期に見捨てられた旧道には、往時の姿が残されている場合が多く、この付近もそうした例の一つかもしれない。

100m少々でまた国道に出る。道は先程とは反対に、国道の北側に伸びているように見えるが、これは近世の街道ではなく明治以後の改良によるもの。この先の狭路を避けて、直接上町商店街に出る道である。街道は右折して山本商店手前の道へ入り、萩原の宿場へと向かう。右折点からほどなく、右側に「墨坂伝承地」の標石が立っている。「墨坂」は墨坂神社のことで、現在はこの先の宇陀川べり、萩原の町の対岸に位置するが、現在地への鎮座は文安6年(1449)とされ、それ以前の所在地は確定的ではない。ただ、伝承などを総合すると、西峠東南のこの付近が有力であるという。

旧道は、この標石の反対側、森の脇を下り、一本下の道に合流する。この数十mの区間は、平成2年(1990)ころ榛原町役場によって整備され、分岐点に新しい石造道標が建てられた。道そのものも、草が刈られて歩きやすくなっている。以前は、雨でも降れば必ず一人、二人とすべった道であった。ちなみにこの付近の通称は「すべり坂」だそうである。

榛原 萩原宿

細い道で家の横、洗濯物の並ぶなかを抜け、再び舗装路に出て家並のあいだを進む。そろそろ宿場の趣の感じられる区間に入ってきた。途中、左折・右折と鍵の手に行く部分があるが、この左手に門前に屋根付きの橋をかけた特異な構えの民家（旧庄屋・前川家、川口屋）があって、目を引く。

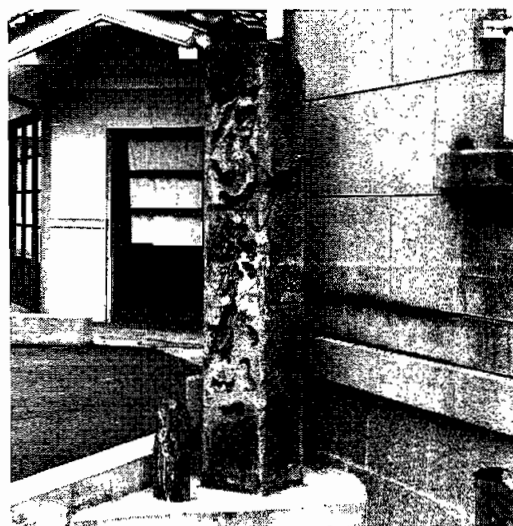
さらに古い町並を進むと、上町商店街の通りに合流する。合流点手前、右側の民家（山下家）の軒先には仁丹体温計の古い看板が残っている。また合流点の右側民家隅に墨坂伝承地を示す道標も建つが、これは軒先に建つ柱の一本の如く扱われている。

上町商店街との合流点から萩原の追分までは200mほど。短い区間ながら、豪壮な古い民家も残っており、軒の上に松を這わせた菅生家などが独特の雰囲気を出している。町並全体を通していえば、特に近世の民家が多いということもないが、明治になってからの家屋も、旧来の家並をこわさぬよう建てられたためであろう、宿場町としての風情は失われていないように思える。

正面に近鉄の高架橋が見え、左側には道が分岐して丁字路になっている。ここが萩原の追分（「札の辻」）で、直進する道が本街道、分岐しているのが阿保越え（青山峠経由）の伊勢北街道である。ここで参宮客がどちらの道を選ぶか、ということは、本街道・北街道それぞれの宿場にとって大きな問題であるから、それぞれの街道筋から客引きが「派遣」されて、自分たちの街道側へと客を呼び込んだという。もちろん今は、こうしたにぎわいを想起させるものは何もないわけだが、我々にとってもこれからしばらく鉄道と離れるわけで、「街道の旅」への決意を深める場所でもある。過去の宝来講参加者にも、この場所に特別な思いを持つものは多いのではなかろうか。

二つの街道の股の部分には大きな石造道標が建つ。「右伊勢本街道 左あをこ江みち」。途中で折れており、コンクリートでつないだのは残念だが、堂々たる書体・彫りである。年紀のところがちょうど補修部分に当たっていてよく読めないが、「文政 戊子」から同11年(1828)と確認できる。

道標の角にある石造の二階建は元の南都銀行榛原支店、その南に数年前まで営業していた造酒屋の辻村家（旧鳥見酒造店）が並ぶ。軒下には杉玉が下げられ、造酒屋の名残を留めている。また、軒先には文政13年(1830)の堂々たる常夜燈、施主に「御室御所御寄附」とあるのは珍しい。御室御所とは



「壬申版」道中記で、「この一角は榛原町の財産。早急な再生策が無理としても、現状を破壊することだけはないよう要望しておきたい」と述べたが、残念ながら第7回の宝来講を前に、札の辻北西側にあった旧郵便局（白壁の建物）が取り壊され、跡地は現在駐車場となっている。榛原町の都市計画によると、札の辻のすぐ東側にある国道165・369号の丁字路を十字路に改修する予定で、丁字路の西側に新設される道は、近鉄大阪線に沿って榛原駅北側までの都計道路として設定されている。この道路がちょうど辻村家付近を通過することになるわけで、札の辻の将来は如何なるや、多少気になる。

札の辻（第6回）

仁和寺のこと。この先の自明にある初生寺は、人脈的にも仁和寺との繋がりが強かったという。道標にも同様の文言が刻まれているが、道標にはさらに「燈籠并道教守護人初生寺」とも記しており、出資者は仁和寺、管理者は初生寺、という関係が見えてくる。一方右側は、阿保越道のちょうど正面に、本居宣長が宿泊した元旅籠屋「あぶらや」（中川家）が、往時の姿のままに残っている。

榛原～桧牧市場

いまや宝来講恒例となった道標前での記念撮影を終え、萩原追分を後にする。近鉄のガードをくぐり、バス通りを横断すると、道は直線になってそのまま宇陀川に突き当たる。この200mほどの区間は商店も少なく、いつ通ってもひっそりとした感じがする。川の向かいに墨坂神社を見ながら100mほど東に進み、天野橋で宇陀川の南側へ渡る。墨坂神社は墨坂神をまつる旧県社で、西峠の項でも触れたように、現在位置への遷座は文安6年(1449)とされている。書紀には登場するが、『延喜式』には記載がない。以前の天野橋は、本街道が宇陀川べりに出た付近から、墨坂神社の前へ架かっていたのだが、街の東側に新道（現在の国道369号線）が設けられたため、橋も新道に接続するよう東に移設されて現在の形態となった。鳥居の位置をよく見ると、以前の橋の場所が想像できるだろう。

この先自明付近までは、国道369号線が近世の本街道をほぼ正確にトレースしている。榛原・札の辻から約1.7kmで桧牧を通過、直進する道もあるが、国道の指示通り右へ曲がるほうが伊勢への道である。分岐点には安達魚店があり、その南側（伊勢寄り）並びに奈良県内でも最古といわれる道標がある。一見、供養塔か墓碑のようであり、また近年風化が著しく、文字も判読しづらいが、「右いせみち 奉供養順礼 左やまみち」と刻んでおり、年紀は寛文4年(1664)10月15日である。「同行十二人」という文字も見えるから、道標としてだけでなく、その見かけ通りの供養塔的な役割も果たしているのであろう。一般に、道標は初期のものほど宗教性が強く、後期になると案内設備として独立したものになってゆく傾向にある。おそらく中世の石造物を発生の起源とするために、こうした傾向がうまれるのであろうが、ここでもまた寛文期の道標にそれを見ることが出来よう。

600mほどで桧牧市場である。「市場」といわれてしまうと違和感がないでもないが、榛原を出て以来はじめて、まとまって商店のあるところである。集落に入る直前の右側に「山神」、集落中央付近の左側、人家の間に「水神宮」を祀っているのが見える。集落東端右側には御井神社が鎮座し、そのさらに東隣には旧桧牧小学校の木造校舎が残る。御井神社は延喜式内社であるが、同名社が他にもあって詳細な由来は不明という。桧牧小学校は、現在旧校舎南方の丘陵上に移動して「内牧小学校」と名を変えており、本街道からも新校舎が見える。残された旧校舎は、地域の活動に利用されているようである。

自明

道は内牧川に沿って、広い谷の南側（左岸）を進んでゆく。ぼつりぼつりと、家が切れも続きもせず点在し、その密度が高くなり始めると自明である。その手前、桧牧小を出てすぐ、右側の分岐点に建つ道標は、「自明」という村名のもととなった竜起山慈明院初生寺を示すもの。自明はこの先の高井とともに、近世初期は桧牧村に属し、いったん「桧牧上村」として桧牧村から独立したあと、自



不動堂にあった茶釜
(自明生活改善センターで保管)



元造酒屋の酒蔵 (高井)



『女人高野 室生山之図』(宮田家玄関)

明村・高井村に分離したという。道の左側はすぐ川で、右側のみに家並が続く。途中軒先に大きな切株を置いた家は山根家。軒下には「きざみ多葉粉」「刻煙草」の看板を吊るし、さらに経緯度を示した標石が立っていて、大変にぎやかである。これによると「北緯34度31分0秒、東経135度59分0秒、海拔317.6米」だそうである。現在は折れてしまっているが、桧牧小にも木製ながらやはりこれと同様の経緯度表示があった。この付近の流行なのであろうか。

生活改善センターの先で一度集落が途切れ、右側に山が迫ってくる。これを過ぎると、崖下に磨崖仏・役行者像・供養塔・不動堂などの並ぶ一角がある。現在の不動堂はかなり新しい建物だが、ここには以前から堂が建ち、接待所を兼ねていたと伝えられている。道者を接待した茶釜もあったが、現在はさきほど前を通った生活改善センターで保管されている。初瀬や郡山の商人が施主となり、文化期に寄進されたものであるという。

堂のすぐ先には、榛原町役場による「右いせ本街道」の道標があって、右手に上る細い道がある。民家が4～5軒ほど並ぶ部分を通り過ぎると、林のなかに入っていくが、左下方、木々のあいだから

国道が見えており、ほぼ並行していることがわかる。この道はさきほどの人家の部分で長らく行き止まりとなっていたのを、榛原町・自明区協同で再整備して、平成2年(1990)秋に開通させた。たしかに、入口付近の民家の並び方からいって、こちらが旧道であろう。ただ、再整備の必要があったという点は、この先、奈良・三重県境地帯にかけての「林道化した峠道」よりも荒れた状態だったことを感じさせる。また、再整備から間がないためか、路面が完全には落ち着いておらず、やや歩きにくい感じも残っているようである。宝来講は第5回(1990)まで国道を通行してきたが、再整備に伴って、第6回(1991)からこの旧道を通行している。国道の車もさほど多くない区間であるが、旧道を通るほうが気分的にはかなり楽である。

林を抜け、左下方に国道を見ながら進む。前方に高井の集落が見えはじめると、国道の擁壁の上に出る。本来はもう少し先で国道に出ていたのではと思われるが、再整備の復活旧道はここで鋭角に折れて、国道へ下りてくる。国道の改良工事で、取り付け点付近の地形も大きく変わっているであろう。国道に下りてから例によって想像力を働かせると、擁壁の上から集落の入口まで達する道が空中に浮かび上がってくるだろう。

これも一般論ではあるが、自明～高井のように狭い溪谷を行く街道は、最も初期には川沿いの岩場などを辿るコース、「道を開(拓)く」という余力が生じてくると、一転して山の上を高捲きし溪谷の危険を避けるコース、さらに近代となって機械力が導入されると、両者の中間付近を切り開いて、平坦かつ安全なコースへ落ち着く、という傾向を見せる。これに当てはめれば、現在の国道は最後の部類、再整備された旧道は「山上高捲き」のパターンといえる。これ以前、溪谷伝いのコースがここでも存在したかどうか、現在のところ明らかではない。

高井

高井駐在所、農協内牧支所と並ぶ付近から、現在の国道は大きく右S字を描き、集落を避けて通っているが、旧道は橋をわたって直進である。なかなか落ち着いた町並が続き、袖壁に屋号を記した家などもあって、独特の雰囲気を持っている。左側にある酒屋の蔵も堂々としている。かつては造酒屋だったが、酒造業界の大規模化・銘柄化が進んだため、販売専業に転じたという。

集落東端付近、高井バス停のすぐ先に、道標3本の並ぶ分岐点がある。一番右が弘隆寺を示すもので、昭和51年(1976)の建立と新しい。中央のものは「左室生山道」で大正4年(1915)4月。一番左の道標は寛政12年(1800)、「左室生山女人高野」まではよいのだが、小さく「右いせみち」ともある。しかし本街道は左が正解で、現状と合っていない。他所よりの移設であろう。

伊勢へ行く我々に対して「室生」「室生」の集中砲火は不思議に感じるが、近世の室生寺参詣の表街道は、この高井で伊勢本街道から分岐するルートをとっていた。

左の道を行くと100m少々でまた分岐点があり、その中央、頭矢橋(矢谷川)の欄干に寄り添うように、「右室生山道」の道標が立っており、指示通り頭矢橋を渡って右の道へと進む。橋のたもと、道の右側には「太神宮」常夜燈も建っている。

尾根の耳にそって右に回り込んでいくと、右側に石仏と道標がある。頭矢橋から100mほどでまた分岐点があり、榛原町による新しい道標(「右いせ本街道 左仏隆寺」)が建つ。20mほど先にも右

庭先の旧街道

こうした「庭先・縁先をかすめる旧街道」はこの先も多く目にするが、大袈裟に言えばこのあたりに近世と現代との「道路に対する距離の取りかたの違い」がある。われわれ現代人にとって、縁先は通るのも通られるのも気が退ける場所なのに対し、近世この道を取り巻く環境ができあがったころには、そうした意識がなかったのである。道が車のものになると、否応なく庭との区分をするようになるが、この付近にはつい最近まで自動車が乗り入れられない区間が多く残っていたため、近世的な世界が残されたともいえる。

道標などとともに貴重である。室生寺の参詣者はここで仏隆寺方面への道に入り、参宮道者と袂を分かった。高井付近は、今でいう近鉄室生口大野駅むろうぐち おおののような役割を果たしていたわけである。

宮田家をあとにして、庭の一番奥から、先ほど見えていた新道に合流する。他人の庭先に侵入したようで少々後ろめたいが、皆そう考えて庭先を通らない新道を付けたのであろう(☹)。

赤埴

宮田家からの道は、コンクリート舗装の急坂である。まもなく左手上方に石垣とかなりしっかりした土塀が見えてくるが、これが松本家で、赤埴村の庄屋であったという。営業の時期は不明ながら、「大和屋」という屋号で旅籠をしていたこともあり、当時の看板などを所蔵している。松本家の角の反対側には、途中で折れた道標が建っている。これも「右伊勢道 左室生山」を示しているが、左にとれば先ほど分岐した仏隆寺への道に合流する。



仏隆寺門前

仏隆寺

高井には仏隆寺を示す道標も多い。どこにある？どんな寺？と気になる人も多いだろう。

仏隆寺は、宮田家前から室生寺への途中にあり、室生寺の南門として宿坊などの重役を担っていた。嘉祥3年(850)、空海の弟子・堅恵による創建。また大和茶発祥の地でもある。

谷あいの田畑の中を行く旧室生道は、舗装こそされてはいるが、車で走るのはもったいないくらい静かでのんびりとしている。ゆるやかな上り道を行くと、やがて仏隆寺の辻堂に着く。辻堂前の分岐点には「右はせ道」「左むろ道」と刻んだ2基の道標が立っている。右への道は赤埴越えができる以前の古い本街道といわれ、諸木野へと続く。

小川を渡って石段を登ると山門。石段の両側には数十本の桜があるが、ひときわ目をひくのが樹齢900年という古桜。春には淡い色の花をつける。

古桜が山里の遅い春を彩り、秋には彼岸花が里を真っ赤に染める。はるか後方には光明岳がそびえ、谷あいには棚田が続く里は、まるでむかしばなしの世界のようである。

右手下方に内牧川筋の谷と国道が見える。知らぬ間にかなり登ってきていて、天気さえ良ければかなりの眺望も効く。わずかな距離だが、梅の木が両側に立ち並び、振り返ると梅のトンネルのむこうに松本家が望める。この日の行程のなかでも、特に気持ちのよいところである。

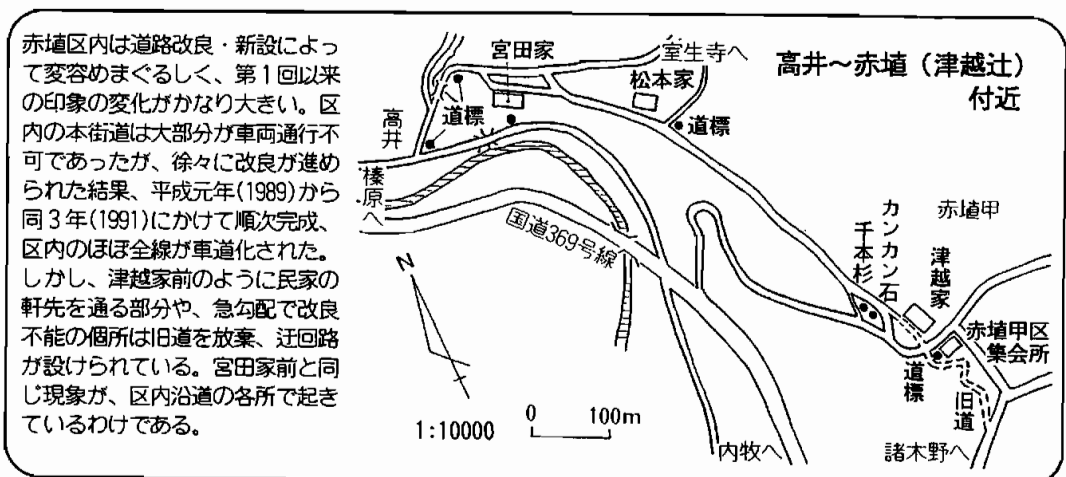
道は車一台やっとの幅で、杉林の中へと入っていく。しばらく進むと、歩道が右手へ下っており、この下の車道に合流している。「伊勢参宮本街道ハイキングコース」と記した朱色の矢印がこの道を指しているが、これは最近新設された道であり、ここは直進する。分岐点のすぐ先、右手（谷側）に、注連縄を張った巨大な杉の木があらわれる。これが千本杉で、付近の杉の木はすべてこの木と根がつながっているという伝承が「千本杉」の名の由来である。株元にある井戸は、杉が水を集める働きを利用したものといわれる。道端には杉の木を祀る祠が建つが、この横にある岩が「カンカン石」で、石で叩くと独特の響きを発することからこの名がある。

以前は一本道であったこの付近も、道路新設が進んでかなり複雑になってきた。すぐまた分岐点があり、直進の道が本街道である。急な坂を上った先の左側には、土蔵に続いて大きな大和棟の民家が見えている。元旅籠の津越家である。昭和63年(1988)ごろまでは道の右側にも家屋があったが、これは取り壊されて跡地が広々とあいている。しかし、現在は分岐点の直進側に止まりがしてあり、進入禁止としているようなので、右側の道へ迂回する。この道も、先ほどの歩道と同じような下りになっており、20mほどで同じ車道に合流する。

合流点から左へ進むと、車道は左へ曲がっていき、ちょうど津越家の付近を迂回したところで、津越家の前を抜けてきた旧道と交差している。「津越辻」と呼ばれた所である。左を見ると、津越家の堂々たる大和棟の全景が目に入る。迂回する車道が設けられたため、津越家向かいの家屋跡地と旧道敷は、ともに津越家の庭のようになっている。

辻の右側にあるのが、赤埴甲区集会所である。第1回(1986)のときには、この前にシートを敷いて昼食をとった。第2回(1987)以後、諸木野での昼食という日程になっているが、初瀬から歩くのであれば、むしろこのあたりで昼食にしたいところである。幸い、昭和62年(1987)に改築された集会所には、休憩用とも思えるスペースがとってあり、少人数なら雨でも困らず昼食をとれるだろう。

集会所の手前角には「右いせみち」を刻む道標と万葉歌碑がある。本街道の旧道は、津越家の前か



六十六部回国供養

「六十六部」とは日本六十六カ国の社寺に法華経を納めることを目的とした回国巡礼で、略して「六部」ともいう。「回国供養」はこうした巡礼に対する供養の意味である。江戸時代には僧俗を問わず多くの者がこの巡礼に出たようだが「三都ともを巧人はれに扮して出づる者」も甚だ多かったという。

菅野村の行悦による回国供養碑は「為回国供養」の文字と「はせ」「宮川」への距離を刻むものが多い。唯一、長谷寺のものには延享4年(1747)の年紀があり、他もほぼ同時期と思われる。多気町中牧のものだけが角柱形、他は自然石型。行悦の居村である菅野には、書体・石材・彫りともに一連の供養碑に似ている道標があるが、銘がなく確定するには至っていない。

この配置からは神末～下仁柿にもあった可能性が感じられる。埋没や盗難も考えられるが、移動して残されていることも期待したい。

「菅野村 行悦」の回国供養碑

奈良県

桜井市 初瀬(長谷寺) 緑輝碑

宇陀郡榛原町 赤埴

室生村 黒岩(宮城口)

曾爾村 山粕 緑輝碑

御杖村 神末(佐田峠)

三重県

飯南郡飯南町 下仁柿(四番組)

多気郡多気町 中牧

※ 他に御杖村菅野に行悦のものと考えられている道標がある

ら車道を横断し、この道標が示す坂道を一気に下って、屋根の落ちた廃屋の前に出ていた。しかし、その先の旧道には、道路新設のために蛇籠(15頁「土籠籠」参照)が据えられ、非常に歩きにくくなったので、第7回(1992)以後、本隊は新道を通行することが多くなった。車道を行くと集会所のすぐ先に、周辺案内図と「伊勢本街道」を示す木製案内標柱のある丁字路がある。これを右折、ここからが新設された道である。100mほどで「伊勢本街道」の案内標が立つ変則三叉路に出るので、これを右斜めに入る。まもなく、谷から上がってきた旧道と合流する。

そのまま進むと200mほどで小さな集落、中垣内に出る。民家の庭先を抜けるような所もあるが、これも改良が進んで以前ほど「庭先」ではなくなってしまった。第1回(1986)の頃には、洗濯物に触れるような距離で、申し訳なさそうに通らせていただいた、という気がしていたが、改良の結果、道路と庭との区分がはっきりしてきた。

家がなくなると、また近年拡幅された区間になる。上りが200mほど続き、低い峠を越えると今度は下りになる。林を抜けると、前方に大久保の集落が見えてくる。ここも数軒の小さな集落で、集落中ほどに分岐点がある。本街道は、直進の登り勾配の道の方である。右へ大きくカーブを描いて谷筋の方へ下る舗装道路は、この先で国道と諸木野を結ぶ新道に合流している。新道は完全舗装で、地元車は本街道経由ではなくこちらを通っている。

分岐してすぐ、左、右と曲折を繰り返すと、集落は終わり。左側にある集落最後の民家は現在無住になっている。この先に菅野村行悦による回国供養碑がある。旧街道に面して立っているものはこれが最初である。

諸木野へ

両側とも杉林となって、人家も見えなくなる。道は舗装になっているが、幅は車一台ぎりぎり、路面も荒れているところが多い。さきほどの分岐点から約500mで再び分岐点である。舗装路は上り

続けるが、右側へ平坦な未舗装路が伸びていて、こちらが本街道である。宝来講と伊勢迄歩講の案内標のほか、榛原町の標柱も立っており、見落とす危険は少ない。

道はここまでのアップダウンを繰り返した状態とは違って変わり、ていねいに等高線をなぞるような進み方になる。以前は少々大きめの石が転がり、草鞋組にはこたえた道だったが、諸木野関跡の整備に伴って碎石が入れられ、ぐっと歩きやすくなった。しばらく進むと左手に、その関所跡の碑がある。関所は長禄2年(1158)興福寺大乘院によって設けられたもので、室町時代後半期には廃止されていたらしい。碑は平成5年(1993)に新設されたもので、周辺もこれに合わせ休憩所として整備された。谷をひとつ渡ると、道は若干の上りとなる。低い尾根を南側へ越えて東へ向き直れば、諸木野は間もなくである。杉林を抜けて少々行ったあたりから集落全体が見渡せるが、天気の良い悪しにかかわらず、ここから見る諸木野の集落は美しい。榛原から7km少々である。

集落内に入った道は、一度山側へ捲き上がってから集落中心部へ下りてくる。これを忘れると木工所に突っ込んでしまうから、注意がいる。木工所の直前で左へ上がる、コンクリート舗装の道が本街道である。

集落の中心といっても商店などはなく、国道からの車道と合流したり、寺(大乗寺)への入口だったり、ポストがあったり、ということで「集落中心」と呼んでいるにすぎない。車道との合流点にも榛原町による道標が立っているが、「右いせ本街道 左仏隆寺」はどうであろうか。左側は仏隆寺へ向かう道だけでなく、初瀬への道でもあり、この指示地名では、街道の全体像として、若干正確さに欠けはしないだろうか。

ともあれ、この合流点から100mほど行くと、左側に「伊勢本街道」を示した案内標柱が立っており、この角を左折したすぐ右側が昼食地点として定着してしまった森本一文氏宅である。もともと、第2回(1987)のときに、雨天のためサポート隊が諸木野へ先行し、軒先の借りられそうな家を探してお願いしたのが始まりであったが、以来晴れても降っても、ここでの食事は変わらず続いている。初めてのときには、突然のことにもかかわらず、人数分の味噌汁を用意していただいたのには驚かされた。心遣いもさることながら、人数分(この年は、しかも過去最高の30名での山越えであった)の器がある、ということだけでも、街育ちの者は驚いてしまうのである。諸木野では、現在でも屋号で呼びあうといい、森本家は「大門字屋」。往時9軒あったという旅籠屋のひとつであった。あるいはこうしたことも多数の器があることの下地ではあるかもしれないが、一種のカルチャーショックを受けたことは確かだった。

風景に目を転じると、森本家は集落東端付近の、石割峠にかかる登り道の入口に位置しているので、若干高い場所にある。狭い谷ではあるが、南に向いた斜面中腹の、やや広がったところに集中して集落を形成しており、晴れていれば冬でも午後によく日が当たる。2日目のコースの中では、ちょっとしたオアシスのような感じさえる。

なお森本氏宅には、第6回宝来講(1991)のおりに、宝来講OB・吉瀬文人氏の手になる講札が贈られた。基本的には宿とする旅館4ヵ所を対象とした「指定旅舎」の看板だが、このみは、昼食地点ながら講札を贈る対象に含めた。「大門字屋」の復活、といえるかも知れない。

石割峠

さて「大門字屋」をあとにして、本街道へ戻ろう。森本家横の狭い道を上り、すぐ石垣に当たって右折、これが切れたところで新道に接近するが、直前でまた左折して坂を上っていく。坂道の下には、石垣で囲った水場が残る。すぐアスファルト舗装の民家進入路を斜めに横断する。右側に常夜燈が建っているが、足元にあるプランター状の石桶は、以前この向かいの森田家で山水を溜めるのに使用していたものという。旧道はまた民家の裏側を抜け、左側に石仏のある辻で新道と合する。ここで少々寄り道して新道を20mほど戻れば、「大門字屋」をはじめとする諸木野の家々が、まさに箱庭の如く見える。印象的な場面である。

アスファルト舗装が途切れてから、集落と離れて2軒ほど民家があるが、これは現在無住となっている。榛原町の人口は、天満谷ニュータウンの開発で全体としては増加しているものの、それ以外の地区では減少傾向にあって、これは奈良県内の郡部ではどこも同様である。

いよいよ石割峠の上り道にさしかかってきた。「石割」の名は、峠付近の石を割って開削し、道を通したためとも、冬期の冷え込みで石にしみ込んだ水が氷結して石が割れるため、ともいわれるが、たしかに冷え込みの厳しい峠である。第1回(1986)の時には、しみ出した山水が路面の全面にわたって氷結、少し気を抜くとすぐ滑った。周囲が高いために、それほど高所にいる感覚はないが、これから登る峠は標高695mで、生駒山(642m)よりも高い。もちろんこの街道の最高地点である。

ただ、この石割峠も変貌を遂げつつある。4m幅の車道で諸木野と上田口を結ぶ計画があり、これに石割峠を利用することがほぼ確定した。峠部分はトンネルとするか開削とするか、まだ決定していないが、平成5年(1993)秋現在、すでに峠西側の道は全線にわたって簡単な改修が実施され、東側も別ルートにより上田口まで車道が開通している。四輪駆動の軽トラックなら十分通行可能である。

集落を出てしばらくは普通車でも通行可能な道が続き、いくつかある橋も全てコンクリート製で、しっかりしている。簡易水道の浄水場を過ぎた直後に、直進か橋を渡るか、やや迷いやすい所があるが、橋の手前に標柱が立って「伊勢本街道」の腕木が対岸を示しており、橋を渡った先にも標柱が見えている。迷いやすい部分はここだけである。



雪
地球の温暖化現象によるのか、最近の宝来講では雪に降られることは少ないが、この石割峠付近は、降り出した雨が10分後には雪に変わるほど気象が不安定で、難所・悪路の多い2日目の行程をより困難にする。雪となれば周囲の小枝や笹が雪の重みでしなって歩きにくくなり、道幅が広ければ路面にも相応に積雪する。こうなると平地用の靴では心細くなる。逆に、草鞋は冷たさこそ極みに達するが滑る心配はほとんどない。
だが靴組に対策がないわけではない。1m程度のわら縄が2本あれば、靴に巻くだけでも滑り止めとして十分役に立つ。宝来講では毎年大量にわらを調達するから、そのおこぼれを少々頂戴して燃っていく。無論自分で作ることが肝要である。

雪の石割峠 (第2回)

三つ目の橋を過ぎてしばらく行くと、右手に道標がある。目の高さにあるので見落とすことはなからうが、峠道でアゴを出しながら登っていると、視線が落ちてしまうので気をつけたい。中央に「南無阿彌陀仏」と刻み、両側に「右 はせみち」「左 いせみち」と記した自然石型道標である。峠の中でこうしたものに出会うと、励まされているようで元気が出たりする。



石割峠 旧々道の六字名号碑

さらに進むと、橋が三つほどあるが、いずれも諸木野川か、その支流を渡るもので、谷筋そのものの大きな分岐はない。五つ目の橋の先で、丁字路のように正面が突き当たりになって見えるが、ここにも

「伊勢本街道」の案内標があり、腕木が左を指している。以前はこのあたりが車道の終端となっていたが、現在はさらに車道が続いている。橋をもうひとつ越えると、やがて腕木付き標柱が2本立っている分岐点が見られる。左は三郎岳(879m)の登山道、右が本街道である。以前は「伊勢本街道」を示す右側の標柱がなく、迷いやすい分岐点だった。さらにわずかの距離で二度目の分岐点。わかりにくいのが、宝来講と伊勢迄歩講の道標が左側の道を指している。ただし、便宜上こちらを通っているだけで、本来の旧道は右である。この旧道には間伐木が放置され、クマザサも生い茂って現在は通行できなくなってしまったが、近世の六字名号碑が残っており、道の新旧を物語っている。

さて、左の道にはまた分岐点があり、これまでと同じ幅で左へ曲がって急な坂を登る道と、直進する細道とに分かれる。どちらを行っても、数十mで合流する。広い道のほうを進むと、途中で別の谷へ向けて登る道が1本ある。もう峠は近い。谷の北側斜面にとりついて登っていく。谷に沿って右に曲がり、左に向き直ると石割峠である。伊勢迄歩講による「石割峠」「専明寺まで35分」の看板が見える。ここで榛原町を離れ、室生村に入る。ふつうなら峠で一服というところだが、ここはいつ通っても下からの風が冷たい。遅れ組を待つ先着部隊は体が冷えてくる。先達が出発を指示するまでもなく、参加者から「はよ行こ」の声がでるのも、この峠ならではの光景である。

下り道にかかる、峠のすぐ下に分岐点があり、右斜めへ進む道と、左へ折れる道の二手になる。本街道は左の道である。少しわかりにくいのが、道の左側に案内標が立っている。少し行くと道は右に曲がって、峠をはさんで上り道とちょうど線対称形になっている。谷の北側を進むのも上り側と同じである。

谷の北側斜面に行くということは、南側にひらけているわけで、しかもこの付近は頭上の杉林が切

沿道のまち⑤ 室生村 (奈良県宇陀郡) 人口 7,107 所帯数 2,066 面積107.99km²

〔沿革〕 明治22年室生村、三本松村が成立。昭和29年室生村山粕が曾爾村へ。同30年合併で村域確定。

〔概況〕 宇陀郡北東に位置する大村。村域の大部分は山地か小盆地だが、中央部を東西に貫く宇陀川に沿って国道165号と近鉄が通る。村内にある女人高野・室生寺は全国区の知名度を持っている。

〔街道〕 宇陀川に沿って伊勢本街道が東西に貫通、伊勢本街道は村域南端の田口地区をかすめて通る。ほかに村域北端を笠間越伊賀道が通り、これらを結ぶ南北の道が村域を縦断する。宝来講では、本街道を経由し、上田口と黒岩の集落二つだけを通して曾爾村へ。ただしその曾爾村山粕ももとは室生村だった。

れているため、晴れていれば、大変気持ちのよい区間である。途中からはもともと車道だった区間になり、路面も落ち着くが、この道を道なりに進めば下田口の石割・原山地区方面へ出てしまう。上田口へ行くには、もう一度人道に入らねばならない。道がゆるく左へカーブしている部分の右側に、文字部を一段凹ませた道標があらわれる。「右いせ 左原山」を示しており、10mほど先に右へ下る細い道があるが、これが本街道である。増水時には水路となるのか、かなり荒れた道であり、よく先を見ながら進まないで、周囲が浸食され孤島状になった部分に迷い込んで、戻るはめに陥る。大変歩きにくく、先ほどの気持ちのよい道とは正反対……なのだが、荒れた道が“行場”を想起させるためか「千日回峰ごっこ」が始まるのもここである。

道は途中で、下田口石割と上田口とを結ぶ林道に突き当たる。この丁字路を右折、歩きにくさは相変わらずである。耐えて下ると、突然目の前が大きく開けて、道は右へ曲折、同時に大型車も通行できそうな幅となる。上田口からのトラックや作業車が、ここまでは入ってくるのであろう。あとは、道端に丸太が転がっていたりするこの道を道なりに進むと、左手下方に上田口の集落が見えはじめ、道もアスファルト舗装となって集落に入っていく。

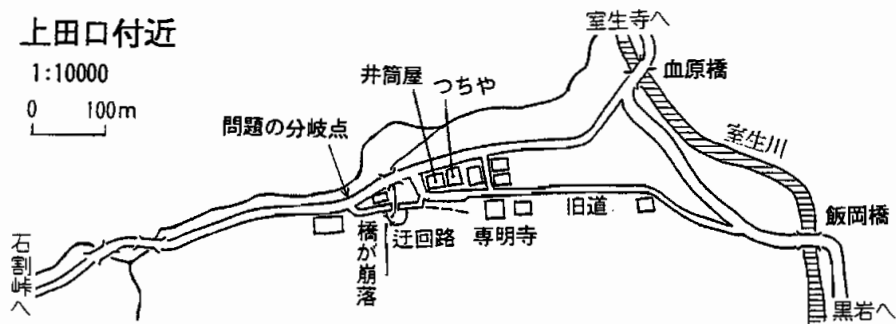
上田口

パラバラと家が建つ区間を抜け、最初の人家から400mほど進んだところで、道は二手に分かれている。右は民家の玄関前へ出る未舗装路、左はこの民家の裏手へ回り込む舗装路で、どちらかという左のほうが街道らしく見えてしまうが、旧街道は右である。左の道は血原橋、下田口から室生寺方面へと続いている。見落としやすい分岐点なので、要注意。さて、右の旧道へ進むと、この家の前を過ぎた所で橋が落ちてしまっており、右手の山側に付けられた迂回路を通行する。丸太を組んだ小さな橋でいったん右手の山側へ渡り、落ちた橋の部分を行き過ぎてから旧道側へ戻る。住宅跡とおぼしき小さな畑を左側に見ながら歩くと、すぐにこの畑は尽きて、左側が大きく開ける。道はまだ直進しているが、住宅跡の石垣に沿って左側に下る小径が分岐しており、丁字路となっている。これを下って行くと、ちょっとした広場のように見える土の道に下りてくる。旧街道としては少々不自然なルートのとり方なので、道沿いにある家屋の改修などの際にかき上げされたものかも知れない。

この「広場」の前には、かなり大きな規模の大和棟の住宅が2軒、ひっそりと建っていて、その美しさには圧倒される。上田口宿の旧状を示した図が『室生村史』に掲載されており、それによれば、手前（西側）が元旅籠の「井筒屋」、東隣が狂屋をつとめた「つちや」であるようだ。この2軒は現在どちらも無住だが、そのわりには荒れていないところを見ると、家筋の者が定期的に帰省するなどしているのであろう。荒れさせてしまうのは惜しい建物である。

道はつちやの横からゆるい上りで、専明寺の境内へ出る。右に本堂、左に門と鐘楼、従ってここは完全に境内なのだが、道はさらに先にも続いている。つまり道が境内を貫通してしまっているわけである。ただ『室生村史』によると、専明寺の向かいには「みきや」という古い廃家があったということであり、現在坂道・門・鐘楼のあるあたりは、「みきや」の土地だった可能性もある。そうになると「境内を貫通する街道」という形態が出来上がったのはそう古いことではあるまい。

例年、この専明寺で小休止とし、峠越えのあとの一服にあてている。



大難所? 上田口 ——ルートミスに気をつける!——

上田口付近は宝来講にとって難所中の難所。それも峠が険しい、などの理由ではなく、道を間違えやすい、という事情による“難所”である。

そもその原因は、室生方面との分岐点が分岐点らしくないことにある。現在の旧道は民家の庭先としか見えず、舗装路自体は一本道だから、分岐点を通じたとも思わないだろう。「別の道に入った」という意識がないから、当然「旧道に戻ろう」とも思わず、そのまま歩き続けて、気がつけば室生寺の前…というようなことにもなりかねない。事実、第2回(1987)では、本隊より先行した「弱り講」がこの道を直進し続け、一時行方不明になるという騒動があった。

もうひとつ。過去の宝来講では、専明寺正面の坂道を上がって旧道に復帰、境内にて小休止、というパターンをとってきた。ところが、回数浅い参加者などは、これを「休憩のための寄り道」と勘違いして「元の道に戻ろう」という意識が働きやすかった。毎回のよう、休憩後、坂道を下ろうとする参加者があり、第6回(1991)では、ほぼ全員が坂道を引き返すというハプニングもあった。本来の旧街道を通行していないこと、また現在の専明寺境内はどう見ても「境内」であり「街道」とは思えないこと、大きくいえば、このふたつが間違いの原因であろう。

そこで、提言。今後の宝来講では、なるべく本来の旧道を通行するか、それが無理でも井筒屋横から「広場」へ入るようにし、専明寺正面の坂道は通らないよう心掛けたほうがよいと思う。ここでは以上のような観点からコースを案内した。

黒岩から不動坂へ

さて、休憩で生気を取り返して、先へ進もう。道は狭いコンクリート舗装で、上田口の村を見下ろしつつ、斜面の高みに張り付いて進む。両側に家屋や家屋跡らしき畑があって、詳細に見れば、おそらく『室生村史』の図と照合が可能であろう。左側下方彼方に血原橋のバス停が見えている。二車線の県道(吉野室生寺針線)が近づいてきて、こちらも下り坂で歩み寄って合流である。道は室生川を渡り右に大きくカーブ、150mほどでまた左にカーブすると、左側に山を削って付けたような道が分岐しているが、これが本街道である。ほぼ水平な県道に対して本街道は上り勾配になっており、徐々に高さに差をつけていきながら、両者そろって右にカーブしている。

以前の分岐点はもう少し先にあった。県道を行くと左側に「不動明王」の石標が立っているが、この前から石段を上がって上田口不動明王の前で切り返し、現在の車道に合流するのが本来の旧道という。昭和7年(1932)に現在の道が付けられて、不動堂の裏側を通るようになった。しかし、不動堂から現在の本街道までは高低差3mもなく、この経路を通るのも無理ではない。また、昭和34年(1959)の伊勢湾台風頃までは、現在の分岐点付近に道標があったという。不動堂の入口の旧分岐点にあったものを移設したのであろうが、残念ながら盗難にあい、所在不明である。

不動堂の裏手あたりからは、右手下方に県道と室生川が見えているが、本街道はほどなく大きく左

にカーブし、黒岩川^{くろいわ}の谷に入る。一方、県道はこのまま南下して、1km少々南方の辰尾橋^{たつみはし}で国道369号に合流している。本街道は、この先迷うような分岐もなく、一本道で進んでいる。この道は、谷の北側斜面の高いところにつけられており、黒岩川の流れはほとんど目にする事ができない。やがて、上田口から1.8kmほどで黒岩^{くろいわ}の入口に達する。集落西端の三叉路には「右いせみち」を刻んだ小さな道標が立っている。黒岩の集落は街村ではなく、どちらかというところ諸木野のような形態であるが、谷はもっと狭く、集落の中心は現在の道よりもまだ上方である。「陽を求めて高みを上っていった」といえるだろうか。

道標の辻から150mほど行くと、道は右にカーブしている。カーブミラーの前で舗装路から分岐して上っていく細い道が見えるが、これが旧道である。第6回(1991)まで、この付近は新道を通じていたが、旧道が確認されたため、第7回(1992)からこちらに変更した。上っていくと50mほどで集落上部への車道を横断、さらに進むと集落の中に入っていく。「つばきや」という屋号で参宮客相手の宿をしていたという椿本家の前を抜け、20m先で新道への道を右へ分岐、本街道は直進側である。左側に上浪家・西口家が並ぶ前を過ぎると、土地が大きく空いている。ここにも民家(東家)があったが、榛原へ転出して取り壊したのだという。この空き地の先でまた右側の新道へ下る道がある。旧道はこの分岐を左にとり、上浪銘木店の裏を抜けていたのだが、現在は通行不能になっているため、ここで新道に合流する。

旧道は分岐点から80mほど先にある西口家の墓地向う側で崩落している。新道に出て歩くと、上浪銘木店を過ぎたあたりで、左側の木々のあいだにその墓石が見える。さらにもう少し進むと、旧道が合流していたと思われるあたりに出るが、道の跡自体は確認できない。

これを過ぎると人家はなくなり、杉林の中の道となるが、相変わらず舗装のまま、電線もついてきている。どちらもこの先の宮城^{みやしろ}への便である。右カーブ、左カーブと鍵の手に曲がりながら、道は下り坂となってくる。とはいえ、峠を越えたわけではなく、高みに造成された集落付近から、黒岩川の谷底付近に下りてきただけである。林を抜けると一気に谷がひらけて、耕地が広がっている。近世の石高、162.5石のほとんどは、この付近の田を指すのであろう。黒岩の集落付近では、田をほとんど目にしていない。集落付近の険しい感じが全くない、広々とした谷を見ていると、なぜこちらに集落を作らなかったのかという疑問さえ湧いてくる。

左手前方に住塚山^{すまづか}(1009m)がよく見える。道はこの広い谷の南側の山際を進み、集落から1.1kmほどで分岐点に出る。左へ行く道のほうが道続きに見え、電線もこちらへ行くので少々戸惑うが、ここが宮城開拓地との分岐点である。右側の杉林に入る簡易舗装の道が本街道で、道の股には「菅野村行悦」による回國供養碑が立つ。宮城は近世に開拓された新田で、その権利をめぐるのは旧領主・新開の権利者の間で相論がくり返されたという。

不動坂

分岐してすぐは登り道で、コンクリート舗装のうえに石がゴツゴツしている。草鞋には痛い道である。杉林の中でもこの付近は特に暗く、昼なお暗いという形容がぴったりくる。数百mでまた耕地との境目付近に戻り、このあたりからは未舗装の地道となって、歩きやすくなっていく。

林道の支線が分岐しているところがいくつかあるが、迷わず直進を続ける。支線は分岐の角度も大きく、分岐点には「林道〇〇線」としっかり表示されているから、判別は容易だろう。宮城口分岐点から400mほどのところで、右へ上がっていく簡易舗装の道がある。未舗装の本街道よりしっかりして見えまぎらわしいが、あくまで直進である。

初めての微妙な角度の分岐は、宮城口分岐点から700mほどにまず一ヶ所。どちらを通っても山粕には出られるが、左の道は途中で崩れており、宝来講の案内標が右を指している。分岐点のすぐ先、左側の林の中には、なぜか旧道に背中を向けるようにして、六字名号碑が立っている。近世から向きが変わっていないのだとしたら、もともとの旧道は、先ほどの分岐点を左にとり、この六字名号碑の前から現在の旧道に入っていた可能性もある。碑は石割峠の「通行不能の旧道」にあるものとまったく同じ形態で、おそらく施主が同じなのであろう。

この付近で室生村から曾爾村に入り、さらに数百mで二つ目の分岐点に出る。これは左が本街道、右は木材の伐採現場への作業路で、伊勢迄歩講の標柱がある。この先、道は非常に排水が悪くなり、沼のような状態となってくる。悪戦苦闘しつつどうにかこれをかわすと、三つ目の分岐点。ほぼY字の分岐路を右にとる。ここも石割峠と同様、軽トラック程度は乗り入れ可能に改修された。ここまで歩いてきた道だけが人道で残り、車道はY字路の左から右へとついているので、むしろそちらが本道といったふうに見える。分岐の股のところに伊勢迄歩講、右へ少々進んだところに宝来講の案内標が立っている。

あとは不動坂の登り道であるが、この峠は台地状・高原状の室生村側から、谷状になっている曾爾村側へ下るといふ形であり、伊勢へ向かうときの登り道はあっけないほど短い。峠の上はかなり広く、茶店の5〜6軒はとれるだけの面積がある。現在は植林されているものの、石組も見えるので、家屋



佐田の宮跡の陰陽石

不動坂西口の六字名号碑

沿道のまち⑥ 曾爾村 (奈良県宇陀郡) 人口 2,766 所帯数 806 面積 47.61km²

〔沿革〕 明治22年、8村が合併して曾爾村成立。昭和29年室生村から山粕地区を編入。

〔概況〕 青蓮寺川上流の曾爾川に沿って集落が開け、その周囲を1000m級の山が取り囲む。曾爾高原や香落溪、奥香落高原などの自然景勝地に恵まれ、高原の村として観光客も多い。

〔街道〕 村域南端の山粕を伊勢本街道が通り、これと分かれて名張へ向かう道が村内・曾爾川沿いの集落を貫通する。本街道の宿場山粕はもと室生村。近代初頭には官公庁も多く置かれて奥宇陀の中心的集落だった。宝来講は西端の村境から当村に入るが、この山粕だけを通り鞍取坂から東の御杖村へ抜ける。

か耕地のいずれかが存在したのであろう。伊勢迄歩講の「山粕峠」という看板があるが、この呼称は室生村側から呼ぶ場合に多く使われ、曾爾村側では「不動峠」「不動坂」という呼びかたのほうが一般的である。近世の道中記類では室生側の呼びかたに近く、「山粕峠」「山粕坂」などと呼んでいる。

下り道にかかるあたりで、車道は左のほうへ分岐していき、人道に戻った本街道は右手の谷筋へ降下する。登りのゆるやかさとは対照的に、下りは急勾配で、一步步々注意深く下る。途中から道は沢伝いとなり、飛び石もあって、近世の旅もかくやの感がある。峠から300mほど下ると砂防ダムが出現、この右側を下る。急坂のうえ、雨の日などは滑りやすく、要注意箇所である。この坂を下ると未舗装の車道に出る。一見、丁字路のようだが、車道を越えてなおも沢伝いに道が続いている。従来、宝来講ではこの道を通行せず、もう1本上の道を通っていた。しかし、近鉄ハイキングがこの道を採用したことを受けて、第8回(1993)で調査隊が通過、次回からの変更を決定した。車道を越えて急な坂道を下るとすぐまた飛び石があり、あとは谷を右に見ながら一本道で山粕へ下っていく。

右手に国道が見え、国道沿いに2軒ほど並ぶ人家の裏を抜けると、左手の山側に注連縄を渡した2本の木と、やはり注連縄を張ってあるごつごつとした岩肌が見える。これが佐田の宮跡である。岩肌には梵字で不動尊の種子を刻んでおり、弘法大師が室生へ赴く途中に彫ったという伝説もある。しかし、一見してわかるように、陰石(女性器の形をした石)と陽石(男性器の形をした石)がセットになった、いわゆる「陰陽石」で、生命力や生産力の象徴としての信仰がある。明治期に村社の春日神社に合祀されたため、祠などは跡形もなくなってしまったが、現在も信仰が続いている。形態としてはかなり古い自然信仰に属するため、社殿などが失われても信仰が残ったのであろう。また、ここでは「女の神さん」と呼んでいるようだが、陰陽石や陰石は「姫石」「弥菜」などの名でも呼ばれて、全国各所に存在している。

山粕

佐田の宮跡を過ぎれば、数百mで国道369号に合流、そのまま下っていくと山粕の集落である。道の右側に「問屋家敷の碑」があって、碑文からは山粕の人々の伊勢本街道に対する愛着と、荒廃に対する寂しさのようなものを感じ取ることができよう。

さて、山粕の集落内の旧街道については、現在のところ確定的に語ることができない。山粕の集落

問屋家敷の碑

太古より難波と伊勢とを結ぶ伊勢街道が開けていた事は夙に明らかである。徳川期、特に中期に至って熱狂的参宮道者が、姪々と街道をうめてつらなれた。江戸文化の完成期、化政時代に団参は頂点に達し、山粕は青山越高見越の両脇街道に挟まれた伊勢本街道の宿場として栄えた。我等が祖堀井伝蔵・喜八らは問屋の屋号をとえ、此の地に旅宿と問屋とを兼ね営み、文化年間の定宿帖にも登載され、今日尚問屋垣内、問屋谷等の呼称が存することによっても、往時の繁盛振りがしのばれる。

旧伊勢本街道は交通事情の激変に伴いその存在価値を失い、伊勢湾台風以後部分的に廃道と化しつつある。この時にあたり、旧本街道を後世に伝え、同時に堀井伝蔵・喜八の盛時を明らかにすることは意義ないことではなからう。

ここに堀井勲の発起にちなみ、同族力を協せ
建碑する次第である。

一九七六年冬

堀井貞左久

(原文のまま)



は、谷の中央を流れる山粕川の左右に分かれて立地している。このどちら側にも旧街道と思われる道があり、どちらが本来のものか、非常に難しいところである。現在の国道は大部分が川の南側を通るのだが、途中北側を通るところもあって、近世の旧街道としては甚だ不自然である。近世の道をそのまま国道としたものではなからう。

地元での聞き取りでは「南側」とのこと。なるほど「問屋家敷」碑が南側の国道沿いに建っており、街道が北側にあったのでは、「問屋場の跡」というこの碑の意味がなくなる。一方、県教委の『歴史の道調査報告書』は「北側」説をとり、推定される旧道の位置を点線で示している。この北側の道もほぼ通行可能で、家屋の配置などからも街道であった可能性は高い。そこで、もともと川の北側が街道であったのを、近世のある時期に南側へつけかえたのではないか、という仮説が出てくる。ただ、現在のところこれを確認する手段がなく、仮にこうした付け替えが事実としてあったとしても、それがいつごろ、どんな事情で行われたものかを検討するのは、至難のことであろう。



参考までに、両方のコースを大まかに記しておく。

北側の道は、山粕の集落に入っすぐ、左側山沿いに並ぶ人家の列にとりついて進む。谷底の川沿いに行く南の道を見下ろすように、かなり高いところを通っている。途中人家が絶え、ずいぶん細い道になるが、専光寺の前へ抜けたところで舗装道路に合流して再び集落に入る。学校の裏を通り、春日神社の前では鍵の手に右・左折、近年造成された公営住宅の中を抜けて昭和橋を渡り、国道に合する。

南側の道は、集落に入ってほどなく橋を渡り、山粕川の南側に出る。酒屋、たばこ屋と高井以来ひさしぶりの商店が並んでいる。問屋家敷碑を過ぎ、前田橋を渡ると、続いて笠神橋があり、国道は山粕川の北側へ渡ってしまうのだが、右側山裾に山粕バイパスが部分開通している。無理やり付けたような仮の連絡道路を通して、二車線の新しい道に出る。途中、酒屋の前で現国道と合流、そのまま山粕の集落中心部をやり過ぎて、山粕東口バス停に至る。現状だけを見る限りとても旧街道とは思えないが、現在のバイパスそのものを通していただけではなく、バイパスへの連絡道路入口付近から川沿いに進んでいたらしい。現国道から川越しに見ると、バイパスのすぐ下に道の跡らしいものが残り、六地藏のような石造物も見える。このコースなら川を頻りに渡ることもなく、問屋家敷碑の前も通るが、残念ながらバイパス下付近で通行不能である。

北側ルート沿いの元西山氏宅には、菅野村行悦の回国供養碑があるが、位置は移動しているといわれている。せめてこの原位置だけでも確認できれば、と思う。

第6回(1991)現在、宝来講ではこの折衷というべきか、西半分は南側ルートを行き、国道が山粕川の北に渡ったところで国道を離れ、専光寺前から北側ルートに入っている。



さて、ふたつの道は山粕東口バス停付近で合流、ほどなく鞍取坂^{くさとり}上り口である。国道改良までは、この付近に山粕東口バス停があった。旧停留所には待合小屋が残っているが、平成3年(1991)夏、この東側にトイレを併設した休憩所が建ち、標識類も整備された。近年の「本街道ブーム」?への対策であろうか。そういえばこの峠の反対側の麓にある桃俣^{ももまた}バス停も、平成元年(1990)ころ建て替えられた。山粕東口は曾爾村の東の玄関口、桃俣は御杖村^{ごぼう}の西の玄関口であり、各村当局が本街道を観光の目玉に据えはじめたことのアラわれかも知れない。

鞍取坂

2日目の日程中最後の峠である鞍取坂にかかる。休憩所の裏側からコンクリートの板橋を渡り、田

と林のちょうど境目を登ってゆく道がある。小さな墓地に差しかかるが、この一番手前に立つのは墓碑ではなく名号碑で、よく見ると左側の側面に「いせみちみぎゑ」と刻まれているのがわかる。向きが違っているので、移設されたものであろう。この下の、国道から休憩所へ曲がる付近に立っていたと考えれば向きが合う。

この横を抜けて登ってゆくと、正面に続く道は平坦になって幅も狭くなる。おやと思って振り返ると、本街道は後方に折り返して登っている。このあと3回つづら折りを繰り返し、さらに波形のカーブを描きながらどんどん登る。比高は120mほどだが、きつい感じがするという点では、^{かいきか}飼坂峠（三重県^{いちし}志^{みすぎ}郡美杉村）よりも上であろう。謠われた難所だけのことはある。このあと道は尾根上に出てクマザサの茂る道を行き、一度山の南側斜面に抜ける。この斜面を通る道には、ほんの1mほどながら幅が年々やせてきていた部分があったのだが、これもブームの影響か通行に支障のないよう整備された。これを抜けると再び尾根道で、尾根上に堀を割ったような感じである。そして再び尾根北側の斜面に戻り、上っていく。このあたりは上り口の急勾配にくらべると、かなり緩傾斜に感じられるだろう。北側のため生育が悪いのか、この区間はいつ通っても倒木があるような印象がある。最後にもう一度つづら折りで切り返すと、まもなく峠である。峠の上は不動坂ほど広くはないが、茶屋があったようにも思える。ここで曾爾村から御杖村に入る。

土りと同様、下りもまた急な道が続く。峠付近はつづら折りの尾根道、途中から谷道になり、400mほど行くとほぼ谷底に下りきる。ここで谷のさらに奥からの道と合流、あとは2度ほど谷を渡る程度で、とくに分岐などもなく、桃俣・町下の集落へと下りてくる。峠道も終りかけたあたりの左側には、宝永8年(1711)銘の浄空欣了法師塔、集落入口に白髪(白鬚)稲荷神社がある。

桃俣～土屋原

町下はその名のとおり「町家」の並ぶ地区で、現在でも商家の占める率は他の地区より高いという。宝来講の定宿「まつや」も、水害で移転するまでこの桃俣にあった。近世には^{つちやまら}土屋原は宿場の扱いを受けておらず、現御杖村内の宿場は、桃俣、^{うずの}菅野、^{くすね}神末の三か所であった。

家並沿いに道を北上して200mほど行くと、右側に橋が見えてくる。桃俣川に架かる^{おんち}隠地橋で、これを渡るのが旧道である。ここからまつやまでは約1.4km。最後の休憩所をとり、出発である。100m少々で国道369号と合流、さらに400mほどで^{わごう}和合橋を渡って、土屋原川の右岸(北側)へ出る。この先、^{くさか}桜峠の手前まで、道はずっと川の北側を進む。宝来講の時期(毎年2月末ごろ)には、このあたりでとっぷり暮れてくる。道は何度かカーブし、家並のなかに入っていく。暗いので判かりにくいですが、左側には木地を生かした表具屋の看板も見え、街道沿いに栄えた文化の名残を伝える。

この土屋原の家並に入ってからまつやまでが長く感じる、とは参加者共通の感想であろう。この2

沿道のまち⑦ 御杖村(奈良県宇陀郡) 人口 2,991 所帯数 947 面積 79.63km²

〔沿革〕明治22年、桃俣・土屋原・菅野・神末の4か村合併で成立。以来100年、村域に変化なし。

〔概況〕宇陀郡東端に位置し、村境の半分以上は三重県と接する。周囲を1000m級の山に囲まれた高原の村。村域の大半は山林で、集落は各地区の中を流れる小河川が合流する、村の北部に集中している。

〔街道〕村内北部を伊勢本街道が東西に貫通する。土屋原を除く旧3か村は近世の宿場。村内北東端の神末・敷津からは名張道を分ける。また、旧4か村のいずれからも、南方の三重県側へ抜ける間道があった。宝来講では本街道を通り、西から東へ各集落を貫いていき、村域東端から三重県へ入る。

日目と、翌3日目の夕刻は、1日目、4日目の夕刻とは少々勝手が違う感じである。旅人にとって、日暮れが心理的にかなりの重圧であることを、強く感じさせられるのではないだろうか。夕暮れなのか、まつやの灯が見えたときの安堵感というのは、何度歩いても変わらない強さがある。

崖の手前で右カーブ、緩い坂を上りながら山裾を回り込むように左カーブ、その先の右側がまつやである。ただ、これと同じ形状のカーブが手前にもう一つあり、「あれを曲がれば…」と期待して裏切られるといったこともあった。つけたあだ名が「だましカーブ」とは芸がないが、これも参加者共通の思いである。土屋原に限らず、谷沿いの地形は同じような形状をくり返すことが多い。

宿のご夫婦の出迎えを受け、講札のかかる玄関に到着である。温かい濯ぎ湯で足を拭うと、山道続きだった一日もようやく終わり。食堂には2日目名物のすき焼きが待っている。

さて、土屋原情報を。酒屋兼雑貨屋はまつやの向かいにあって、ビールも冷えています。また、都会のようなわけにはいかないが、生活雑貨もあり、榛原などで買いそびれた必需品などはここでも手に入る。もっとも、翌3日目のコース中には、菅野、神末、石名原などに農協マーケットがあるので（旧道を外れれば奥津にも）、ここであわてる必要はないかもしれない。

宝来講定宿帳（其の貳） 土屋原・まつや旅館

桃侯の項でも触れたが、土屋原は近世、宿場としては認められていなかった。桃侯と土屋原の両村は間を隔てる峠もなく、位置も比較的至近である。二か村とも宿場にするは必要なし、どちらかで一か所、とされたのかもしれない。

宝来講定宿「まつや」も、現在地に移転する前は桃侯にあった。鞍取坂を下った道は、町を抜けて隠地橋にかかるが、この橋の少し手前、右側にある倉庫がその原位置である。昭和34年の伊勢湾台風で、青蓮寺川水系も大きな被害を受けた。桃侯川も大出水となり、当時のまつや旅館の両隣は流失してしまった。まつやそのものは流されずに残ったが、河川復旧工事のさいに立ち退きとなり、現位置へ移転することとなった。

このように桃侯は、その地形から災害を受けやすい土地であった。幾度もの罹災によって、まとまった史料といえるようなものが存在しないため、5～6代以前、江戸時代より営業していると伝えられるまつやも、その起源をこれ以上たどることができない。

さて、現在のまつや旅館は、宝来講にとってだけでなく、伊勢本街道のオアシス的存在。道中半ばという地理的条件や、周辺の宿泊設備が少ない、にもかかわらず日帰りするには交通の便も悪い、という事情から、本街道を歩く旅人にとって避けて通れぬ？宿になりつつある。ここに来て、経営者の仲子さんご夫婦と話をすれば、最近どんな人達が本街道を歩いたか、だいたいの情報がつかめる。

ただ、なにぶん御杖は高原の村。冬場に歩く宝来講にとっては、寒さが大敵である。「明日は山沿いで雨か雪…」というような天気予報を聞いて寝た、その翌朝――。

チャリチャリチャリ…。ん？だれの目覚ましや？変な音やなあ…。いえいえ、それは、朝一番のバスの音。もちろん、チェーンを巻いて走る音である。あわてて窓から街道を見下ろすと、外は一面銀世界――。サポート隊長の顔まで雪のように白い…。ほかの三泊では絶対ありえない状況である。